



雪降れば白く

うーさー

目を覚ますと三階の窓の外は、月岡の名に追いつこうとしていた。あと少ししたら、ここは月の岡になる。周囲に大きな建物が無いから、マンションを差す太陽はでかい。冬の夕暮れは一瞬で終わる。燃えて溶ける太陽と白く形を作ろうとする月が、西と東で対峙している。

カーテンは開けっぴろげだった。わたしは女子高生のくせに「いやん」とも思わず、平然と裸のままベッドで寝返りを打つ。素肌を包む毛布が暖かい。どれくらい寝ていたのか、温もりが優しく充満している。惜しみながらも毛布をめくった。申し訳程度にくぼんだ腰や、二次成長期がきたからとりあえずふくらんでおいただけの胸に、はっきりとした影がつく。美白でも小麦色でもない中途半端な黄土色の体が、立派な大人の女のものになったみたいだ。大人にしてくれる彼が部屋にいない。キッチンだろうか。シーツの誘惑から抜け出す。脱ぎ散らした服がなくなっている。

キッチンでは服を着た月岡が、ガスコンロと向き合っていた。湯を沸かした鍋に、徳用ウインナーを一袋、ぼちゃぼちゃとぶっこんでいる。放っておいたら消えそうな淡い男のくせに、豪快に。どうせならポトフにすればいいのに。

「野菜。また忘れてる」

白なのか灰色なのか判断しにくいトレーナーはしわだらけで、跳ね返ったお湯がまた染みを作る。無精ひげが月岡にまた一段と似合うようになってしまうのは、喜べない。

「風呂、沸いてるから。入れば」

月岡は野菜を食べたがらない。

あんたこそお風呂に入ってさっぱり洗って、ドライヤーのついでにひげも剃って、これを機に服も着替えるべきだ。わたしの記憶が正しければ、一昨日にここにきたときも、その服を着ていたはず。

誘ったってウインナーを茹でるのに夢中だろうし、一人でお風呂場へ向かう。ここは月岡の住むマンションの一室だけど、半年も通っていれば、部屋のどこになにがあるのか覚えてしまった。

帰る前に、体を冷やさないように。月岡なりの優しさがお風呂だ。たぶんわたしと十歳も違わない、せいぜい五つ六つ年上。はっきり年齢を聞かなくても、きちんと小ざれいにした月岡を一度でも見れば、わかる。五年か六年か早く生まれただけで、ゆっくり染み込んだあとに気づかせる、暖かい振る舞いができるようになるらしい。五、六年先の自分。想像もしたことがない。月岡はなんだか神様みたいだ。

お風呂場のおいが好きだ。

化粧がお湯に溶けて、汗がシャワーに流されて、シャンプーが泡になって舞い、つるつるてんになった皮膚を石鹸が包む。落ちていくものと、これから身にまとうもの。用なしの汚れとなったものに、清潔を上書きする。入れ替わって混じる場所が、お風呂場だ。月がうすく消えて、太陽が白く昇る瞬間に似ている。夜と朝の入れ替わりは空で行なわれるから、つまりお風呂場は、人間のための空だ。

まだかろうじてでも明るいうちからお風呂場に入れるのは、とても贅沢なことだ。電気をつけなくてもいいってだけで、必要のないものを排除できた気になる。モザイクガラスが取り込む夕陽は、まだらにわたしを飾る。特徴のない顔も、へたくそな脱毛のために剃り残しのある腕も、いつまでたっても大きくなならない乳房も、突然に神秘をまとう。

窓の外が濃紺になると、体は途端に震える。お湯は冷めて、わたしは元の、ぱっとしないいち高校生に戻ってしまう。自分のつまらなさが全面に押し出されているようで、口の中が渴く。陰る体を視界に入れないように、湯船から抜け出す。

脱衣所には寝室に脱ぎ散らしたはずの、わたしの着ていたものが用意されていた。下着は前に置いていったものを、洗ってくれたらしい。身にまとって行く。わたしが脱いだあとに月岡がたたんでくれるから、しわは少ない。制服のスカートやブレザーがしわになったって、家に帰ってからアイロンをかければいだけだ。シャツはどうせ洗濯に出す。自分の服の心配をしてほしい。家賃の高そうなマンションに、一人でうっそうと暮らして。育ちがいいのかと思えば、時間の流れに取り残されたみたいに、だるそうで。

居間は電気がついていた。誰かのいる電気のついた部屋に入ると、肩の力が抜ける。一人のお風呂場だと明かりは邪魔者なのに、変なの。テーブルにはすでにタオルとドライヤーが待っていて、月岡はどんぶりに山盛りのウインナーを、一本ずつフォークに刺して食べている。

「冷蔵庫にサラダがあったんじゃないの」

「食いたきゃ食っていいよ。おとなりが今朝、持ってきた。お裾分けだとさ」

月岡はこっちも見ずにそれだけ言うと、フォークを置いてドライヤーを手に取る。冷蔵庫の中身を勝手に見たことには触れてこない。あぐらをかいた膝にわたしを招いて、後ろから髪を乾かす間も黙っている。温風が吹き出す音に合わせて、骨ばった指の腹がわたしの髪の根っこを動く。やっと肩の下まで伸びてくれた髪が、首筋を不規則にくすぐる。わたしも目を閉じて、黙っていた。髪をかき回されるたびに、シャンプーの香りの軌道が月岡に漂う様子を想像する。

化粧をすると月岡は怒る。ワックスやムース、ケープで髪をセットしていても、汚らしいと顔をゆがめる。香水のおいが大っ嫌いで、マニキュアも、ネックレスやピンキーリングやシュシュでさえも、不純物だと拒む。腕時計は、見つけると眉をわずかに寄せるけれど、ため息を押し殺す。なくてもどうってことないものに、月岡は容赦ない。

お風呂上りの水滴を取っ払うのも、月岡の役割なのだ。取りこぼさないように、徹底的に追いかけて回す。それでいて髪を引っかいたり、タオルで体を削るほどの勢いをつけたりは絶対にし

ない。わたしは安心して月岡に体を託す。

「ウインナーだけを大量に食べるほうが、よっぽど不純物を取り込んでんじゃないの」

ときどきお裾分けを持ってくるおとなりさんが、月岡の食生活を知っていて野菜ばかり持つてくるのだとしたら、失礼じゃないか。野菜のみずみずしさがあるから、肉にがっつきたい衝動が生きる。風の吹き出す音に負けないようにと、月岡も声を張る。

「いかにも健康ですって字面の名前のやつが作ったもんなんか、怖くて食えるかよ」

温風が止む。うしろから背中を押されるままに、わたしは前のめりに寝そべる。黙れの合図のつもりだろうか。おとなりさんの話を聞いたたび、帰りに表札を確認しようと思うけれど、いざとなるといつも忘れてしまう。今日こそは。目を閉じて頬を絨毯にすり付ける。

月岡はさっさとドライヤーのコンセントを抜いてまとめて、ウインナーに戻る。こういうとき、わたし自身が月岡の不純物のように思う。服をたたんでくれるのも、髪を乾かしてくれるのも、いつでも放ってしまえるように、整えて置いているだけ、だったら。そうだったら、最初からここに入れてくれなかったはず。大丈夫、邪魔じゃない。

「じゃあ、帰るね」

起き上がって、手ぐしで髪を整える。わたしは月岡にさっさと背を向けて、早歩きで玄関を目指す。フォークがどんぶりにかしゃんと投げ出される音がした。月岡がなにか小さく呟いたのも聞こえなかったことにして、かかとをつぶしたローファーを履くと、飛び出した。おとなりさんの名前は……次こそは。覚えていたら。

*

高校生になった途端に暇で暇で退屈で、特に二年生はやることもなく、誰もかれも必死だった。

たとえば、今。六限目。

黒板にはびっちり、ベクトルを使った計算式が書かれていく。解説が始まって五分ほどたって、まだ解は出ていない。解説が細かすぎるのか、数式が難しすぎるのか。金曜日。一週間の終わり、最後の授業が数学Bときたら、出るものといえば、あくびだけ。

わたしは机に広げたノートに、最初の三文字しか書かなかった。シャープペンシルを投げ出した手で、携帯電話を握る。横に三列と縦に二つ離れた席に、五十分の授業を我慢して向かえた休み時間に話せばいいようなことを、メールで送る。

横に三列と縦に二つ離れた席は、月岡の言う不純物に身を固める、里奈の王国だ。わたしがこうして椅子を引いて、机の中に携帯電話を隠して触っているのに、里奈は堂々としていた。教科書とノートは机に乗っかっているだけで、閉じたまま出番を待っている。このまま手に取ってもらえることはないと知りながら。女王様はその上にででんと肘を突いて、わたしとのやり取りに集中している。「周子、今日の放課後は暇？」ときたから、ファミレスで語る約束を取り付けた。

里奈の右側では昆布ちゃんが前のめりになって、ノートに大きく影を落としていた。眉毛が昆布みたいに太いからって、里奈はそう呼んでくすくす笑う。本人にも聞こえているだろうけど、昆布ちゃんはいつだってノートの中に閉じこもっている。イラストだか漫画だかを、せっせと描いているのだ。シャープペンを握る右手のすべりは滑らかで大きくて、とても数式を写している様子ではない。それに昆布ちゃんは授業中、めったに顔を上げないから、黒板だって見ちゃいない。スカート丈やおしゃれにも、手を加えればいいのに。

昆布ちゃんの後ろでは、ガリガリひよろ長の無精ひげ男子が、わたしと同じ体勢で大人しく座る。ときおり見える手元に一冊の文庫本。何ページかに一ページ、むちむちの美少女のイラストが現れる。それを後ろから左右から覗き見て笑う周りの席の女の子たちは、教壇のおばさんがこっちに振り向いたときだけ、黒板とノートに意識を戻す。

あっちでは彼氏に手紙をしたためるぶりっ子ちゃん。後ろからはなにかを破る音。ぱり、ぴり、と慎重に鳴るそれに続いて、むあっとだるいにおい。思わず息を止める。あめ玉かキャラメルか。後ろの席の伊藤くんは女の子たちにも配れるようにと、毎日お菓子をもち歩いている。さすがは甘いマスクの王子様。安っぽい気配りでも、落ちる子は落ちる。

学校での一年間の過ごし方は一年生のうちに学んだ。中学校と高校とじゃ全然違う。担任は朝と帰りの二回、ホームルームのためだけに教室にくる。合唱や掃除に念を入れたり、ちょっとしたことでクラス会議を開いたりしない。受験のことでせつつかれるのは来年からだ。準備してお

けと言いながら、教壇に立つおじさんおばさんは、なにをしたらいいのか具体的に教えてくれない。今やるべきなのは内容の濃い予習復習だけで本当にいいなら、世の中には予備校や浪人生は存在しない。

身動きの取り方をそれぞれ必死に考えて、必死にやりたいことに興じていた。

「年上なら車もお金も持ってる。同年代なら気軽。周子だったらどっちがいい？」

やりたいことはたくさんあるのに、できることは限られている。とびきりおいしいものを食べたいのに、わたしも里奈も、バイト禁止の高校生だ。安いファミレスに、三百円でおつりがくるドリアと水だけで、三時間は居座れる。

里奈が言っているのは「付き合うならどっちの男がいいか」ってこと。

「年上に決まってんじゃない。同年代って、ばかばっかだし」

ああ、でもお金はあるに越したことはない。たまにはいい感じのレストランで、気取って食事をしながらほほ笑みあうのも楽しそうだ。車はいらない。遠くに行くのと疲れる。デートなら徒歩と電車で行ける範囲で充分だ。となるとわたしの活動範囲内には、いい感じのレストランがない。結局は安いファミレスに行くことになる。それならお金もいらなくなる。車もお金も関係のない答えに放り出されてしまった。

ばかばっかなのがいやで、年上。里奈の質問と噛みあっていない。わたしも里奈もとっくにドリアの器を空にしている。スプーンの代わりとして、里奈は携帯電話を、わたしは鏡を握っていた。なにも塗らないわたしの顔。去年までとは違う色。野菜がどうのと気になるのは、素でも美白でいなければと考えるようになったからかもしれない。

「やっぱそうだよな。年上だよな。便利なものは持っててもらったほうがいいしさ」

里奈の返事も噛み合わない。よーいどんで問題が出されて見当違いの計算をしたのに、導き出された解は一緒。ベクトルの計算なんかより不思議でおもしろい。

里奈と、わたし。生徒指導部を地毛だと騙せる程度の茶髪と、生まれ持ったのまっすぐ重たい黒髪。小指を囲むわっかのピンクと首からぶら下がる王冠と左腕に巻きつく星々と、花のチャームの腕時計。周囲からすれば、ぱっと見からしてわたしたちは噛み合っていないだろう。今は。

「伊藤くんに、ごめんなさいしなきゃな」

伊藤くんは里奈に振られても落ち込まないように思う。二ヶ月に一回くらいのペースで、違う女の子と廊下でキスをしているから。早いとこ断ったほうがいい。里奈が伊藤くんとキスをしているところも、里奈が伊藤くんとキスをしなくなったところも見たくない。

同年代を捨てるとなれば、里奈は年上を選んだことになる。この前の昼休みに話していた、近所のコンビニの店員だろう。里奈にはお気に入りのメロンパンがあって、お昼ご飯として毎日食べている。購買のメロンパンでもなく、スーパーや薬局で売られている大きくて安いものでもない。黄色と青と白を基調にした看板のコンビニ特製メロンパンじゃなきゃ、口にしないと張り張る。毎日のささやかな趣味のようなものだけど、そこに行き着くまでが長かったらしい。里奈がメロンパンを食べ始めたのは、中学一年生になってからのこと。よりよいメロンパンを求めて食べ比べること三年目。高校入学とほぼ同時にそのコンビニのものが一番だと結論づいて、毎日通うことになる。里奈は先月、バイトリーダーである二十五歳フリーター青年から、連絡先を渡

された。

「周子は彼氏、作んないの」

面倒くさい。だって彼氏ができたら、毎朝おはようのメールをやり取りして、一緒に学校行って授業中も隠れてメールをして、休み時間はお互いの教室に顔を出して、お昼になれば一緒にお弁当を食べて、放課後は一緒に帰ってたまには寄り道なんかもして、家についてもまた電話だメールだと慌しい。わたしの時間は消える。

「さっぱりした付き合いだったら、してもいいよ」

「年上と？」

「当然」

年上の恋人とはどうやって出会えばいいのだろう。わたしもメロンパンを求めてあっちこっち旅でもしてみようか。ああ、でも年上だと遊ばれないか心配だ。子ども扱いされたら一気に興ざめ。きみのことはわかっているよ、どうしてほしいのかも理解しているよ、それをほら、口に出してごらんとでも瞳に込められたら、わたしはそいつを蹴り倒す。

月岡はその点、楽だった。

わたしと月岡はモデルと絵描きでいればいい。わたしは月岡のヌードデッサンのために脱ぐ。月岡は脱いだわたしをスケッチブックに刻む。

脱いでいれば、いつか月岡は抱いてくれると思った。男と女として付き合っているわけではない。付き合いたいわけでもない。月岡の前で脱いでいるときは、なにも考えなくていいから。頭をまっさらにしてくれるから楽で、楽にしてくれる人ともっとまっさらになれば、それほどリラックスできることってほかにある？

月岡はわたしが脱いでどんなポーズを取っても、なにを言っても顔色を変えない。起きていても寝ていてもまぶたはとろけている。鉛筆をすべらせるときには少しは目に灯る色も、スケッチブックにのみ注がれる。おまけに帰り際にはモデル料を払いたがる。受け取ってしまえば援助交際みたいで、リラックスもなにもあったもんじゃない。何度も断っているのに、月岡はわたしの帰り際には必ず、財布を広げてうろたえる。苦労があるとすれば、たったそれだけ。

里奈から年上彼氏と付き合うことになったと報告を受けた日から、同じように里奈に彼氏ができたことを知った伊藤くんのりりしい肩が、いつもよりずいぶん下がって見える。

「あのさー桐島、どうして佐野に彼氏なんかできたんだよ」

ふられてそうそうターゲットを変えたのか、でもふられたことは気にしているのか。里奈の話題を引っさげて、べたべた後ろをくっ付いてくる。

「桐島は佐野に好きなやつがいるって前から知ってた？」

しつこい。里奈がトイレや手洗い場や購買や自動販売機に飲み物を買に行く隙を目ざとく見つけて、一人になったわたしをうしろから捕まえる。こんなに引っ付いてくるとは思わなかった。

。

「おれ今は本当に彼女いないんだけど、佐野もそこんところわかってんのかな」

里奈は「ごめん伊藤くんとは付き合えない」とだけ話したらしい。わたしも最初は、伊藤くんが二度と里奈に寄り付かないようにと、彼氏ができたことをていねいに教えてあげた。伊藤くんの長身から漂う、さわやかで軽やかでちょっぴり甘いフェロモンが、肩が下がっているだけでくすんじやってかわいそう。そう思ったのが間違いだった。どうしてなんでどこの誰だいつからと、とめどなく溢れる疑問を投げかけてくる。博物館にいそうだ、こんな幼稚園児。

「桐島って佐野の彼氏、見たことあんの？ おれとどっちが格好いい？ どっちがいけてる？ 何系？ どういう感じ？」

そんな日が何日か続いて、視界に入れなくても耳から侵入してくる伊藤くんに、ついに耐えられなくなった。だってわたしは博物館の職員じゃない。あんたに追いかけてほしい女の子ならほかにはたくさんいるから、さっさとそっちに帰ればいいのに。ただでさえ休み時間の二年六組は騒々しい。ぶりっ子同士が甘ったるい声で叫び、いい子ちゃん同士が羽休めに大げさにはしゃいで、ゴリラみたいな声の男子が回し読みをしている漫画を取り合って、あっちこっちで好き勝手にしゃべっているのが入り交じる。

「プリクラ、貼ってあるから。里奈のペンケース。見せてもらえば」

里奈の缶のペンケースには、一年生のころからのわたしとの思い出が貼られている。去年はまだわたしも化粧もしていたから、ファンデーションと美白撮影効果のおかげで、二人してテカテカの白い顔で写っている。そこに追加された思い出にはわたしの代わりに、営業スマイルが素で通せそうに、人のいい顔の年上彼氏がいる。美白撮影効果をもってしても、肌が小麦色だった。体育会系だ。

「あれ、どうしたの周子。と、伊藤くん」

里奈が戻ってきた。寒さにお腹を壊したふりをして、保健室から使い捨てカイロをもらうことに成功したようだ。戦利品を制服の上からお腹に当てて、けろっと笑っている。伊藤くんは電池が切れたみたいにおとなしくなった。男友達の輪に帰ろうかと、ゴリラのたまり場となっている窓際に目を向けた。里奈はにたりと頬をゆるめる。

「知ってるよ、最近二人、仲いいんでしょ。付き合ってるの？」

「はあ？」

声が裏返る。誰と誰が付き合っているって？ 二人？ わたしと伊藤くんが？ 伊藤くんは最近あなたにふられたのよ。彼の切り替えがいくら早くて、わたしはそんな波には乗ってやるもんか。第一、同年代はいやだって話をこの間、したばかりだ。

「みんな言ってるよ。最近わたしのいないところで、周子と伊藤くんがしゃべってるって」

なにそれ。みんな一体なにをどう見ているんだ。

「しゃべってるのは伊藤くんだけで、わたしは相手してないからね」

「そうだよ。それにおれ、佐野じゃなきゃ付き合わない」

伊藤くんは真顔で言い放つ。

「うわさになるのも実際に付き合うのも佐野がいい、佐野じゃないなら誰ともいやだ」

本人のいる前でよくもまあ恥ずかしげもなく言えたもんだ。ああそうかお得意でしたよねこういうことは。フェロモンをかぎつけて寄ってくる女の子たちはそういう言葉が大好きだもんね。伊藤くんから香るものといえば、わたしにしてみればせいぜい醤油のにおいくらいだ。

くさい、気持ち悪い、かなり痛い三拍子に、つい固まってしまった。わたしの横で、里奈はけらけら笑う。

「周子なら伊藤くんのこういうところもうまく扱えそうだし、お似合いだと思うけどな」

なにを言っているんだか、ねえよく見て里奈、伊藤くんになにを言ってもどうしてやっても無駄な気がして動く気力さえなくしているんだよ、さっそくうまく扱えていないよ。里奈が本気が冗談のつもりか見えないことにも肩を落とす。

「佐野が、そう言うなら」

わたしの心情を知らない伊藤くんは、さらなる爆弾を落とす。

「佐野が言うなら、俺は桐島と付き合ってもいいよ」

このやり取りだけ見たら、里奈と伊藤くんのほうがよっぽどお似合いだ。とりあえずどう罵倒したって真顔の二人に通じない気がする。とりあえず、伊藤くんの足を思いっきり踏んでおいた

。

信じられない、ありえない、人間の考えることじゃない、の「ない」を三つ集めた伊藤くん、残念だけどそんなものを集めたって景品は出ない。ほら、また「ない」が増える。軽い人だとは思っていたところに、軽蔑の色合いが濃くなった。

「あんなのふって正解だよ、里奈。よかったじゃん。もし彼氏からアピールされてなかったら、あんなのと付き合ってたかもよ」

学校から遠ざかる足がざくざく動く。里奈は二歩くらいしろを、黙って話を聞いてくれながらついてきている。

里奈が言うならって、犬か。こっちの顔色を見てへこへこ態度を変える男は、彼氏じゃない。使い駒だ。雑用を押し付けるにはぴったりでも、甘い雰囲気と共に過ごすには邪魔だ。お願い、自分の意思で動いて。

胸はまだまだざらついている。わたしは続けてぶちまけていく。

「だいたいなんなの、おかしいよね。最近男子も仲のいい誰かとつるんでなきゃなにもできないでしょ、女々しいっらないよ本当に」

群れて固まって集団にならないと漫画も読めないなんて情けない。貸せよ待てよいつまで読んでんだよとじゃれているうちにも買いに走って、一人でゆっくり読むほうが快適じゃないか、いつまで読んでいたっていいんだし。

「ねえ周子、同年代の男のいいところってどこだろうね」

黙って聞いていた里奈が、あごに手を添えてつぶやく。いつの間にかわたしの話は、伊藤くんを通して全年代の男子にまで対象がふくらんでいた。

「同年代とは気軽に付き合えると思ったけど、年上も慣れちゃえば気軽に話せるもんね」

「じゃあさ、里奈、このあと時間ある？」

議題が決まったなら歩きながらよりファミレスに入って討論したい。冬季限定のかぼちゃスープを食べてみるチャンスにもなる。別々の家に帰るわたしたちは、分かれ道がきたらタイムリミットだ。気が済むまで居座っていられて、終わりは自分たちで決められる場所でじっくり話し合うのを、わたしも里奈も楽しんでいる。

「ごめん、これから会うから」

彼氏に、と言わないのは遠慮しているんだろうか。

「そっか。こっちこそ急に誘って、ごめんね」

申し訳なさそうに眉をひそめて笑う里奈が胸に刺さる。里奈が幸せならわたしもうれしい、彼氏だってとっても優しそうだから安心して里奈を任せられる。どうしてそんなに控えめになるの、ああもしかしてわたしは無神経だった？ 彼氏ができたことで遠慮してしまうのに、伊藤くん中心に男の話ばかりするから、下手になにか言ったらまずいと思っていた？

「それじゃ、待ち合わせ場所こっちなんだ。また明日ね」

「うん、ばいばい」

里奈はまたメールするねと言わなかったから、わたしも言えなかった。せっかく決まった議題はどこかへ落ちていく。拾おうとしてずっこけたまま、体勢を戻せない。彼氏とのデートが終わってからも一晩かけて議論しようよ、眠らなくたってどうせ授業中にいくらでも寝る時間はあるじゃん。そうかこんなわがままを抱かせてしまうから、里奈は彼氏の話が必要以上にしないのか。彼氏ができるって幸せなことだと思うけど、他人をさりげなく気遣えるほどに大人になれるってことでもあるらしい。幸せになれると幸せを提供できてしまう。彼氏ができれば大人になれる。となるとわたしは大人になって、これか。

*

わたしにも彼氏がいた時期はあった。

一年生の十二月、なんとなくで告白された同じクラスの男子と、なんとなく付き合った。「高校生」「クリスマス」という思春期の盛り上がり要素にもまれていただけだ。案の定、倦怠期になると騒がれる三ヶ月目に大喧嘩になって、自然消滅した。はっきりとした喧嘩の原因は思い出せない。小さなきっかけから始まって、だんだんとたくさんのほころびが積み重なっていった。最後に口を聞いたときまでも、それから、わたしは彼に関心を持てなかった。

それでも終わりはしっかり締めくりたい。一年生の修了式の日、彼の所属していた名前ばかりの生物部の部室——生物室に忍び込んで、うちの猫のえさにしてやろうとありったけの猫缶を持ち出してやった。どうして名前ばかりの部活だったかって、活動内容といえば学校に野良猫がやってきたら、しばらく世話をして新しい飼い主を捜すくらいだったから。暇人め。まあ、優しい人ではあったと思う。

鞆いっぱい詰めた猫缶は女子高生が肩に担ぐには重すぎて、勝手に持ち出したくせに勝手にいらいらした。だけどころなももの持ってこなきゃよかったとは思わない、こんなものを持たせる原因を作った暇人元彼氏がひたすら憎い。そうだ猫缶の中身をあいつの家の郵便受けにねじ込んでやろう、家の前で中身をくり抜いては間抜けだ、そうだ公園に寄ろう、あそこで缶の中身を袋にでもまとめて、すぐに郵便受けにぶちまけられるようにしよう。頭のおかしい女だと思うがいいさ、口先だけの「好き」を押し付けていらなくなったらぞんざいに扱ったあんたが悪い。化粧が濃いと文句を垂れるだけで、好きだと告げた相手の趣味を受け入れてくれる気がないのは丸出しで、ほらやっぱりあんたが悪い。

頭のおかしい人間は公園にもいた。わたしなんかよりよっぽどおかしい。鬼ごっこにブランコに砂場遊びにはしゃぐ子供たちの真ん中で、噴水に頭を突っ込んでいる。噴水を囲うように遊具が並ぶから、真ん中にででんと大きいおかしなものがあれば、いやでも目がいく。わたしがしようとしていることが、ちっぽけにしぼむ。植え込みのあたりに落ちている椿の花たちと、なんら変わらない。これからは梅や桜の出番だから、わたしたち、もうおしまいなのよ、と。

噴水に沈んでいた顔が飛び上がる。水をまとった髪がうしろに振り払われて、しぶきが陽の光にまたたく。きれいだな、と釘付けになって、目が合った。男だろうか、眉根が寄っている。息が苦しいのかなに見てんだよと思っているのか、どっちにしたってそっちが変なことしてるんから仕方ない、注目を集めているくせににらんできて、どうかしてる。

「腹へった」

かすれたテノール。赤やら黄色やらの汚れがひどい白のパーカーが、濡れた形に重たく変色している。どこかで嗅いだことがあったようなにおいが、わたしの呼吸を無意識に止める。服装こそみすばらしいけれど、声は若い。もう一度、「腹へった」と男はつぶやく。誰に？ こっちを

向いているけども。しっかりとした口調だ。気がふれているわけではないのだろうか。男が大きく体を震わせて、くしゃみをする。やっぱり寒かったらしい。そりゃそうだ。

「おまえ、なんか食べ物持ってねえの」

おまえ。誰のことだ。たぶんわたし。男はわたしをじっと視線で射止めている。わたしは魅せられたまま動けず、目を背けられない。おなかの下のほうが、じくじくする。痛いというか、くすぐったいというか。噴水とわたしと男だけが公園から切り取られて、違う場所に飛ばされたみたい。子供たちが遊んでいる。保護者たちがおしゃべりしている。わたしたちだけがギラギラにらみ合っている。これで正常なんだろうか、この人。

「ある、けど」

食べ物。持ってる。猫の。

鞆を地面に下ろして、詰め込んだ猫缶を一つずつ取り出して並べる。全部マグロ味。

猫缶だって、気づいていない？ シーチキンの缶詰だと勘違いして、ないな。大股で歩み寄ってきて、並ぶ缶の前にしゃがみ、一つ手に取った。ラベルを確認している。わたしもつられてしゃがむと視線を合わせた。缶には猫の写真も載ってれば、猫用だと表記されている。それを見ても、男は缶を開けにかかった。ポケットからカッターを取り出して、刃を立てる。原始人か。がさすがと缶にぶつけて、こじ開けてしまった。

一つ開けるとコツがつかめるものなのか、わたしの鞆のおもりになっていた缶を全部軽くしてくれた。空っぽになった猫缶は、ねちよっと汚れている。猫が食べていたらもっときれいに空になっていたと思う。口元を袖でぬぐって立ち上がると、男は言った。

「おまえ、なんで人間の食べ物をくれないんだよ」

全部食べたくせに。わたしと男の目の前を、黄色い蝶が通り過ぎる。のん気なものだ。わたしたちが間抜けに見えるからやめてほしい。あっち行け。手で振り払う。

「おれが猫にでも見えたか？ それともおまえ、猫か？」

「わたしが猫に見える？」

「実は猫なんだろう、人間は猫缶なんか食わないって知ってるか？」

「知ってるよ、わたしも人間だもん」

「人間なのに人間の食べ物を知らないのか、なんだそれ」

「知ってるってば。猫のえさだって、食べるためのものなら食べ物でしょ」

だんだんむきになって、だんだんヒートアップしてわたしも立ち上がった。気がついたら男のマンションまでついて行ってしまった。男が部屋のドアに鍵を指したところでさすがにまずいとは思った。それなのに男はわたしを見下ろして、口元をゆがめる。「ここまできたくせに帰るのかよ」と挑発でもされているみたいだったから、引き続きにらみ返す。表札に「月岡」とあったのを横目に、冷たい静けさに満ちた部屋に踏み込んだ。

「なんで噴水に頭突っ込んでたの」

ソファにお尻を沈めて、革の感触に背筋が伸びる。月岡はわたしにコーヒーもお茶も特になにも出さず、自分だけカップに牛乳を注いで体に流し込んでいる。猫缶、牛乳、こいつこそ、本当は猫のはず。

「ああいうとこって、子供がふざけてなんか投げるだろ。なにかしら落ちて潰れてないか、探してたんだよ」

どうして探していたのかが知りたいんだってば。落ちていて潰れそうなものなら、噴水の中じゃなくたって、道路にもベンチの下にもありそうなのに。

「蛙」

「蛙？」

「よく潰れてたんだ。昔。季節によっては銀杏とかトマトとかも、道路に」

「田舎に住んでたの？」

「よく二階の窓から眺めて、描いてたんだよ」

会話をしてくれ。

「バケツにたくさん捕まえるんだ。飼いたいわけじゃないから、捕まえるだけ捕まえて、バケツをそのへんに、ふたもしないで転がしとくだろ。逃げるのに失敗したやつらは、次の日に道路で潰れてる」

「それを、描いてたの？」

「すっげー生臭いんだ。梅雨は特に、雨のにおいも混じるから」

この月岡って人は本物の変な人なのかもしれない。

「窓はだから、開けらんねえ。いつも閉め切ったまま、眺めてたんだ。どうせ外に出るときには嫌でも臭いのを吸い込まなくちゃならないから、臭いはそこで覚えとくんだ、ちゃんと描けるように」

電気もつけないカーテンも開けないこの部屋は暗いけれど、本棚に英語の本やスケッチブックやキャンパスが並んでいることはうすらぼんやりわかる。油のにおいはたぶん油絵の具だ。そうか、公園で感じたにおいは、美術室と同じものだ。

芸術家にはぶっ飛んだ人が多いって言うから、月岡もぶっ飛んでいるんだろう。つながらないやり取りなのに、わたしの頭には蛙の光景が浮かぶ。気分のいいものだと思えない。それでも、描いた想像を消すのが惜しくなる。

さっきまでつんげんとやり取りをしていたのに、ここに入ってからわたしも月岡も、大人しくしていた。下手に声を出したり物音を立てたりしたら、この部屋は壊れてしまいそうだ。月岡ももうわたしに文句を言わない。となるとわたしも突っかかる必要はなくなる。騒いだ反動か、この静けさはすっきりと心地いい。

月岡がテーブルにカップを置いた。こと、と鳴って、時間に区切りがついたみたいだ。月岡の一挙一動が、この部屋を支配している。立ち上がって本棚からスケッチブックを一冊取り出した月岡は、とがった鉛筆の何本かを見比べる。

「絵を描くの？」

「ヌードだったらおまえを描いてやる」

月岡はこっちを向いて、笑う。わたしを追い出したいのかと思った。怖気づかせて、ここから排除したいのかもしれない。

「いいよ。ヌード」

せっかく口は動かせたのに、ソファに沈めたお尻は重い。どうしてここにいるんだろう、そう
だあいつとの最後に復讐をしてやろうと思っていたのに忘れて溶けてしまったからだ。出たく
ない。ここに一秒でも長く身を置かせて。追いつかないで。

「描いてよ。わたしをどういうふうに描いてくれるのか、見たい」

ここにいるための理由がほしい。月岡は無表情だった。わたしをあおった色は瞳から消えて
いて、冷めたような寝ぼけたような、興味のないようにぼやっとしている。ふりかもしれない。
わたしを値踏みしているところを悟られたくないんだ。本当は仮面の下でわたしについて計算し
ているんでしょ。答えが出るまでの沈黙に震える。待つのが苦痛なのはじれったいからじゃない
、拒否されたら出て行かなきゃならなくなって、月岡とは一生会えなくなって、肩の力を抜ける
場所が奪われるからだ。

たどたどしくブレザーを脱ぐ。腕が重い。カーディガンもシャツも、ゆっくりボタンを外す。
シャツの袖から腕を抜いた。手を後ろに回して下着のホックもと思ったけど、うまくつかめない
。月岡はぼやとした目でわたしを見ている。いつも肩紐を抜いて、ホックを前に持ってきて外
していることがばれてしまう。

「そのままでもいい」

いつの間にか選んだらしい鉛筆を親指で手のひらに転がしながら、月岡は言った。今すぐ絵を
描きたいのにくだらないうことで時間を浪費したくないってか。上半身は下着一枚、下半身はスカ
ートもなにもかも履いたまま。脱ぐか着ているかの区別をつけたいのに、月岡はスケッチブック
を開くとさっそく鉛筆を滑らせていく。

始まってしまえばわたしは動くわけにはいかない。仕方なくソファにもたれてため息をつく。
春先とはいえ肌をさらせばぴりりと冷たい空気が気になる。それでも不思議と、鉛筆がスケッ
チブックにこすれる音を聞いていると、体の力は抜ける。ときたまこっちに向けられる視線は、
熱い。するどく射抜かれて、なぜだか無性に、眠くなった。風邪を引いたときみたいに、まぶた
が熱で重い。いつしかお腹に力が入っていた。公園にいたときと同じ。じくじくする。その感覚
が体を下りて行って、足の付け根にまで伝わった。とがった視線を感じるたびに、内腿をすり合
わせたくなる。だけど描いてもらっているんだから動いちゃいけない、動いたらだめ、下半身が
痺れる、体の中心がうごめく。

気がつくとも肩がこわばっていた。ゆっくりと深くため息を吐くことで、激しくなった鼓動をい
くらか抑える。呼吸が和らいでいく。誰にも見せたことのないこの体を、月岡は視線でがしっと
受け止めてくれている。だから安心できるのかもしれない。

一晩たって、全部脱がなくてよかったと心底思った。上は黒字にピンクのラインが入ったもの、下は淡い水色にミツバチのイラストがついているもの。いくらおめでたい季節になろうとしているからって、上下バラバラの下着を晒すのは、あの場にふさわしくない。特に下。小学校の修学旅行のために買ったものだ。悪くならないからなんとなく履き続けていたことに、今さらいらだつ。

慌てて上下セットの下着を五種類ほど買い、一番お気に入りのものをつけて、月岡の部屋を訪れる二回目は四月に入ってすぐだった。お小遣いは消えたけれど、遊びに行けない分、時間はあり余っている。

頭がきちんと道順を覚えていたために、迷子にならずにすんだ。呼び鈴を鳴らすと玄関に出てきた月岡は、ほんのり眉をしかめながらも、部屋に入れてくれた。靴を脱いで、ゆっくり息を吐く。受け入れて、もらえた。

「また描いてよ」

相変わらず招き入れておいてわたしを放り、月岡は鉛筆を研いでいる。わたしはコートを手で脱いで、ソファに投げ置いた。ぐしゃっと広がったコートのとなりに、腰を下ろす。ソファが沈む。

「今日はちゃんと全部脱いじゃうから。ね、描いてよ」

舌が上あごにくっついている。余裕ぶっていないと落ち着かなくて、頬の筋肉だけは持ち上げ続けた。カーディガンから腕を抜いて、ワンピースも下からたくし上げる。今回は中途半端な格好にならないように、がらっと脱げるものを選んだ。お腹に触れる冷たい空気に、ますます肩が力む。ワンピースから頭を抜く前に、こっそり深呼吸をする。

下着姿になって月岡に向き直る。息が止まった。いつの間にか月岡はすぐ目の前に立って、わたしを見下ろしていた。怪訝に細めた目はそのままに、あごでわたしを差す。

「汚いもの、つけてんじゃねえよ」

「汚い？」

「どこか畑の前でも通ってきたのかよ。おまえ、菜の花くさい」

「うわ、におい、移っちゃったのかな」

「風呂を貸してやるから、落としてこい。それと、これも」

これ、と指差したのは、おろしたての下着。桜色に、茶色でどこかの国の言葉が書いてある。読めないけれど。

「化粧だのエッフェル塔だの、いらぬものは落とせ。きれいじゃないものは、描かない」

エッフェル塔？ ブラジャーのセンターホックを隠すためか、小さな塔の飾りがぶら下がっている。これのこと？ これ、エッフェル塔なのか。東京タワーかと思っていた。

「化粧は落とすとしてさ、エッフェル塔はどうしたらいいの」

くっついているんだから落としようがない。真っ直ぐ月岡を見上げる。月岡は無表情に手を伸ばす。その先がわたしの胸元に向かっている、と気がついて身を縮めて、思わず目をつむって

しまった。ぶち、となにかが千切れる音が聞こえた。

「これでいいだろ」

恐るおそる目を開ける。月岡の手に、エッフェル塔。胸元を見下ろす。ない。フランスの象徴は豪快に奪われた。やっぱり原始人だ。でも、確かに。エッフェル塔があるからなんだっていうんだ。世界史の教科書に載って、覚えなきゃいけないことが増えるだけ。いらぬものは、なくてもいい。余分なものがないから、きれい。当たり前でシンプルな月岡の美学に、またお腹の下のほうがじんわり痺れた。

「化粧を落としてきたら、描いてくれる？」

わたしの声は震えていた。本当は強く迫りたい。月岡は千切った飾りを指でつまんで、あちこちから眺めながらうなずいてくれた。お風呂に入るためのいらぬものを、取り払う。指がこわばっていて、せっかくセンターホックにしたのにやっぱりもたつく。乳房のてっぺんに外れていく布がこすれて、背筋が粟立つ。下も。紐と大差ないわずかなつなぎ目に、手を差し込む。座ったまま脱いだらソファの革を汚してしまいそうで、お尻を浮かせる。太股に、ひざ裏に、足首に降りていく細い感触に、ひざを付きたくなかった。代わりに大きく肩を下ろす。脱いだものをソファに投げて、月岡と向き合った。

「お風呂、どこ？」

聞くだけのことなのに、月岡がひどく気の抜けた顔をしていたから、全身の力を込めなくちゃならなかった。それでも月岡のために口を開けて息を吐いて声を出して尋ねると、心に灯りがともったような安心感があった。

*

安らかなのはいいことだ。さらに安らげて気持ちよくなれるなら、もっと踏み込みたくなる。初めて描いてもらった春の日から半年とちょっとが過ぎた今も、月岡の手は伸びてこない。

この部屋に通うのはわたしが行こうと思ったときだけ。約束をしなくても、月岡はたいてい部屋にいる。わたしの気まぐれで週に二回か三回、ここに脱ぎにくる。いなかったことは片手で数えるくらいだ。フリーターか、面倒くさがりやの大学生か。どっちともしっくりくるように感じる。きっちりした月岡は、スケッチブックの外にいない。

だからずれてるんだな。週に二回も三回も、多いときには五回も異性の裸を見ているのに、意を決してきわどいポーズも取ったのに、触れるのは鉛筆と紙だけ。今日だってわたしはシーツにお腹も頬もくっつけて、腰を持ち上げてみたのに、月岡のジーンズは余裕のまま。ちっとも苦しそうにならない。わたしの腰が痛んだだけで、終わってしまった。

「もう帰るね。りんご、むいといたから早く食べなよ」

どうせ食べもしないくせに、キッチンにりんごがあった。食べもしない不純物をわざわざ買うだろうか。例のおとなりさんのお裾分けだろう。お風呂上りにむいておいた。ひき肉をこねて自分で作ったらしいハンバーグが、ピンクのねちょねちょ姿のまま、焼かれるのを待っていた。

わたしが玄関でローファーを履き始めても、カッターが鉛筆を削る音は続く。お風呂上りの足を通したタイツは、朝から履いていたものだ。気分のいいものじゃない。いくら冬の夜が寒くたって、お風呂の心地よさを体感したあとに、こんな生々しい暖かさはいらぬ。

壁に手をつく。向こうに聞こえているのかいないのか、どっちでもいいから口に出す。

「わたしってさ、女としての魅力、あるのかな」

カッターの音が止まる。聞こえているらしい。

「美人でもないしかわいいわけでもないって、わかってるけど」

はだしの足音が近づく。

「きれいだと思わないものなら、おれは描かない。きれいなものを描けば、きれいでいられる気がする。潰れた蛙の絵だけじゃ、売れないんだとさ」

月岡はカッターを握ったまま、わたしの後ろから続ける。

「女うんぬん言ってんなよ。おまえみたいなやつは、まだまだ女の子くさいよ」

足の裏から頭のとっぺんまでを、鳥肌が駆け抜けていく。通過した跡が熱い。

「なんだよ。いっちょ前に、色恋沙汰で悩んでるのか？」

なんで気づかないのと言えた義理じゃない。抱いてくれないことを気に病んでいると伝えたって、わたしと月岡は恋人同士ではないから当たり前のことだ。わたしは月岡を男として好意を抱いているわけではなく、月岡はわたしをモデルとしてしか見ていないから、やっぱり当たり前のこと。今だって思い出したように、そういえばとモデル料のことをつぶやき出す。受け取って

たまるか、でもわたしはモデルをやっているわけだし、学校はバイト禁止で、違う受け取らないのはそんなかわいい理由じゃなくて、ただ触れてほしいのにそしたらわたしはもっとリラックスできて、月岡はわたしに触れて、安らぎを感じる？

「どうするよ、今までのぶんも一緒に」

「うっ、さい、ばか！ もう、なんでこんな」

月岡につかみかかる。わたしはなんで、ばかなんだ。大人になれない。月岡はわたしに、なにも求めていない。モデルだってわたしが勝手に冗談に乗っただけで、わたしがいなくても、ほかのものを勝手に描いていたはずだ。

つかみかかろうとしたわたしの手を、月岡は腕で受け止めようと構えた。そうしてむき出しのままだったカッターの刃が、わたしの手のひらを、滑る。月岡が空いている手で肩を押さえてくれたから、倒れこまずにはすんだ。横に長く引かれた線に、ぷっくりと赤が浮かび上がってくる。じわじわ湧き出てくる様子を眺めているうちに、頭は冷えていった。ひりつく手のひらを握って隠すにも隠せない。下手に動かせば、もっと溢れそう。

顔を上げる。肩が跳ねて、一步退いてしまう。

月岡が、凝視していた。わたしの手のひらの赤い線を。充血しかけの目を、ぱっちり開いて。肩を上下させながら。

月岡の手から、カッターが滑り落ちた。月岡は代わりにわたしの手首を強くつかみ、さらに近いところから傷口に視線を注ぐ。半開きになった口から熱っぽい息が吹きかけられて、わたしは苦痛に身悶えた。

「や、だ……ね、痛って、痛ってば、ちょっと！」

履いたままだったローファーのつま先で、腹を蹴り上げてやる。手首の拘束が解かれる。振り返ることなく、夜道へ飛び出した。

さんざん触ってもらうことを望んでいたのに、いざ手が伸びて唇がこっちを向いたら怖くなった。絵を描くときとも違う、もちろん普段とも違う色。あれは男の目だ。熱にうるんでいた。抱いてほしい触れてほしいと思いつけていられたのは、ぼんやりと静かにひっそりたたずむ姿しか知らなかったから。初めて月岡を、生きた人間だと飲み込めた。神様なんかじゃない。

切れた手のひらに絆創膏を貼った。手を動かしたらすぐにしわくちゃにずれてしまう。仕方なく、上から包帯を巻いて押さえ付ける。ひどい怪我でもしたみたいだ。里奈は朝一に見て眉をしかめたけれど、痛くないかと聞いただけで、それ以上は触れてこない。伊藤くんは気がすむまで大爆笑をして、お見舞いとガムをくれた。ぶどう味。

「しゅーうこ」

間延びした里奈の声にはとつする。向かい合わせにくっつけた机に、里奈は三つもメロンパンの袋を並べる。そのうちの一つはとっくに空だった。二つ目も、あと数口でおしまいになりそう。雪をイメージしているのか、砂糖が表面を白く柔らかかに飾っている。

「どうしたの、ぼーっとして」

フォークでつまみ放しだったウインナーは、たこの形をしている。口に放ってしっかり噛む。口だけでもなんとか笑ってみせて、なんでもないよと答える。里奈には月岡のことを話していない。

「里奈もなんか、ぼーっとしてるじゃん。元気ないね」

「そうかな」

隠しているつもりではない。なんとなく、言いにくいだけ。告げるタイミングがなかった。...いつも一緒にいるのに。でもそれは里奈も同じだった。自分から彼氏の話をしてこないから、そう、それと同じ。

「なんでもないよ。今日もメロンパン、おいしいし」

本当になんでもなかったら、ちゃんと視線をぶつけて言うんじゃないの。

「周子もそうじゃん」

里奈と一緒にいるのが楽しい。ささいなことから会話がふくらんで、どこに行き着くわけでもなく、延々と議論することに夢中になれる。となりで笑い合っているだけで、わたしたちは女子高生なんだと感じる。わたしはそう思っているよ。

「周子も元気ない。次の授業、一緒に寝ちゃおっか」

ねえ里奈もそう思ってくれている？ 笑っているのは口元だけだった。里奈の目は右側を向いているわたしもつられてそっちを見る。一人で弁当箱をつつく、猫背。

「暗っ」

里奈の吐き捨てた言葉は、聞こえていたと思う。わたしもあははと笑ってみた。

「昆布のくせに、見てんじゃないよ」

昆布ちゃんは弁当箱に目を落としている。指定の長さのスカートも、量の多い髪も、姿勢が相まって重さ十割増だ。

「女としてどうよ、あれ。ねえ周子。自分が子供を産んだとして、ちゃんとおしゃれに育つよ
うな、かわいい子じゃなきゃいやだよね」

言いながら、里奈はうんうんと相づちを打つ。それから短く舌打ちをした。

「でも子供は大人が育てるものでしょ。若いうちから子供を産んじゃう人が多いから、子供が子
供を育てるとは一って、頭でっかちなおじさんがうるさいんだよね」

いつもの議題だろうか。それにしても声が弱々しい。たどたどしい。

「ゴムの厚さはシャーペンの芯と同じかもうちちょっと薄いくらいじゃん。そんなのがあるかない
かで、わたしたちの年頃は世間からの目の色が変わるんだよ、不思議だね」

メロンパンが潰れる。ぼろぼろ落ちて、袋の底に溜まっていく。

「あっても、だめなときってあるよね」

里奈の手は震えている。

「二十四時間だか四十八時間だか、たったそれだけの制限時間を気にして、念のためって警備を
厳重にするとき、えらい人はどういう顔をしてたらしいんだろう」

「ねえ、それってもしかして中に」

言いかけて、右側の床が激しくなった。耳をふさごうとしたときには鳴り止んだ。痛々しく椅
子を引いて立った昆布ちゃんは、うつむいたまま教室を出て行く。里奈が鼻で笑う。

「刺激、強すぎたかな。だったら聞き耳立ててんなって感じだよね」

わたしも里奈を真似してみようとしたけれど、笑えるものか。中に出されるどころか、中に入
ってくる痛みも、指の腹でなぞられる感覚も、わたしだってまだ知らない。

*

傷がすっかり治ったころ、雪が降った。天気予報は雨だと言っていたのに、空は寒気を爆発させた。

帰りのホームルームの途中だったのも忘れて、クラスメイトたちはわっと窓の外に群がる。

「こら、おまえら小学生か」

担任のため息は誰も聞いちゃいない。わたしも自分の席から、窓の外に釘付けになった。

月岡から離れた日々が続いている。あの部屋に暖房器具があったかどうか、思い出そうとしてやめた。

この一年で聞き慣れた騒々しさの中に、小さく椅子が床をこする音を見つけた。里奈だ。どさくさにまぎれてかばんを抱えて、教室から出て行ってしまった。

担任は窓から生徒をはがそうと、必死になっている。

「ちょーっといいいかな、桐島」

突然後ろから呼ばれて体がこわばる。伊藤くん。机に伏せて寝た姿勢のまま、わたしを目だけで見上げていた。ちょいちょいと小さく手招きをされる。しつこく付きまとってきたころも、授業中や大人が話しているときは、絶対に声をかけてこなかったから身構えてしまう。

「佐野、どうしたんだよ。帰っちゃってさ」

大人でも、ここにいる大多数も気づかなかったことを、伊藤くんは逃していなかった。雪よりも佐野が美しいよ、ってか。ずっと見ていたんだらう。

「今だけじゃなくて、二人ともなにかあったら。最近、佐野と桐島、ぎこちないよな」

ぎょっとした。そこまで把握していたとは思わなかった。わたしは自分のことで、いっぱいだったと、ようやく自覚する。ゴリラの笑い声の中にいながら、伊藤くんが横目でこっちを見ていたことに、全然気がつかなかった。

「やっぱりおれ、佐野が言ったとおり、桐島と付き合ったほうがいい？」

伊藤くんは無表情だ。細められた目にきらきらが無い。声はしっかりしているから、落ち込んでいるわけではなさそうだ。

「言ってたじゃん。おれらはお似合いだから付き合ったらいいのにつてさ」

「付き合ったらいいとまでは言ってなかった」

伊藤くんはやっぱり真顔で、きょとんと言ってのけるから、ますますわからなくなる。どういうつもりでこんなことを言うんだらう。感覚が狂っているんだ。あんまりにもとっかえひっかえしすぎてしまって、伊藤くんも、ずれているんだ。

ずれている。月岡も、伊藤くんも。たぶん、わたしも。

ずれている。

「……わたしと、付き合う？」

あの部屋から逃げたのはわたしだ。女として見てほしくありながら、男を見た瞬間、怯えてしまった。それなのにまだ月岡を気にかけている。執着している。月岡がいい。月岡に抱いてほしい。もっと深いところで落ち着きたい。月岡も男だったから、踏み込んでみれば、肩の力を二人でどろっどろに抜けるはずなのに。

「いやなら付き合わなくても、いいよ。けど、一回だけ、お願い」

「一回？」

まばたきを繰り返す伊藤くんに、うなづく。

女の子くさいのが鼻につくなら、月岡がそこに魅力を感じないのなら。

「相手してよ。場所はどこでもいい、任せるから」

捨てる。

捨てよう。

担任が無理やり起立と礼とさようならで締めくくったホームルームのあとも、同級生たちは外の白に夢中になっていた。こういうところでだけは、わたしも大人ぶって、ため息を吐いてしまう。根も葉もないうわさの二人が、うわさ通りのことをしようとするには、ちょうどよく紛れられるごたつきだった。

「あのさ、桐島」

伊藤くんの声が低い。かすれる喉に力を込めて、精いっぱい「普通」を装ってみることにした。

「わたしたちがどうこうってうわさ、まだ続いてるよね。伊藤くんは女の子たちからなんか言われぬ？」

「おいって。桐島、聞ってる？」

「ギャル系の子が突っかかってくるんだけど、ってわたしが言えないか、ギャル系とか」

「なんでおれなの？」

伊藤くんがしゃべり倒して、わたしが適当に打ち切っていたのは、まだ最近のことだ。今日は反対。わたしはにじむ汗を、慣れない雪道歩行のせいにする。

伊藤くんの口調は乱雑で、男のにおいに満ちている。きらきらオーラはちらついていない。上履きと一緒に、学校の下駄箱で眠っているのだろうか。なんだかまじめそうで、困ってしまう。多少くらい動揺してくれていい。こっちから仕かけなくてもやれるぜラッキーって、浮かれてもかまわないよ。今の伊藤くんの表情、肩の力を抜いて、目も力がなく、この顔を見たことがある。月岡の部屋でのわたしだ。外で身にまとうものを脱ぎ去った、裸のわたし。

「度胸試してみたいなものだよ。別にどうでもいいし、そういうの」

「相手が誰とかも？」

「う、ん」

捨てるのは、伊藤くんの部屋で。

玄関には白い筋だらけの古いランドセルが放られていた。大きな、いかにも日本って造りの家の一階からは、テレビの音が聞こえた。誰かいたんだろう。伊藤くんの手を引かれて真っ先に二階に連れて行かれたから、挨拶する間もなかった。こういうとき、彼女でもなければ親しい友人でもないのに、挨拶するものなのかは知らないけれど。

伊藤くんの部屋はたたみの上に布団がだらしなく敷きっ放しで、机の上もノートや教科書が山を作っているんだか崩れているんだか。壁には筋肉質な外国人のポスターが貼ってある。バスケットのボールを持っている。きっとプロの選手だ。むきむきの腕が、少し怖い。適当に座れよと言われるままに、ガラスのミニテーブルの前にぺたんこ座る。伊藤くんは、早速ベッドに座った。布団とベッド？

「女子ってさ、こういうの、初めては好きなやつって思うもんだろ」

「どうせいないし、そんな人」

「まさかとは思うけど桐島、おれのこと、好きだったりする？」

「まさか」

指示されたように座ったのに、伊藤くんはわたしをベッドに手招く。最初からそっちに呼ばよかったじゃないか。となりに腰を下ろすと、こぶし一つ分くらい空けておいた隙間を、伊藤くんは一気に詰めてきた。

「脱がしてもいやがるなよ」

「慣れてるから平気」

脱がされるどころか、自分から脱ぐことに慣れている。肩を軽く押され、わたしは後ろによろめく。そのままぼすっとシーツに落ちた。固い素材だなと思った。反転する視界に、かけ布団に埋もれたパジャマを見た。幼いパステルグリーン。弟か妹がいて、一緒に寝ているんだろうか。

「余裕そうだな」

伊藤くんがまばたきをした。近くで見ると、長くてきれいなまつ毛だ。

「本当に、誰でもいいんだな」

うなずく。最初は誰でもいい。次に月岡に抱いてもらうための、一回きりの行為だ。

伊藤くんは目を細めた。べたべた引っ付いてくる忠実な犬の色合いが、消え失せる。蛇だ。弓なりに形を変えた目尻は、すっかり別人のもの。シーツを握る。しがみつく。こんな薄いものを握ったって、自分の手のひらに自分の爪が食い込むだけだ。痛い。足りない。歯も食いしぼる。頭が力んでぐらついてきた。足りない。いたぶろうと笑う目から、意識をそらすにはこれっぽっちも足りない。

「おまえ、とんだビッチだったのな」

……捨てた。

「よかったの？」

里奈とじゃなきゃ付き合わないと言っていたのに、こんなこと。

伊藤くんは横たわったまま、大きく息を吐く。汗が乾いてきた。風邪を引いてしまう前に、服を着たい。それなのに腰は重たくて、背中がしわだらけのシーツに張り付いている。思い出しての恥ずかしさを悟られないように、できるだけいつものトーンの声色を意識する。これであってらっけ。

「別に。おまえこそ、いいのかよ」

なにを今さら。伊藤くんはこっちも見ない。取り繕うつもりはないらしい。そっけない声に熱こそもっていないものの、かったるさがたくさんこもっている。

「いやだったの？」

「別に」

別に、って、想像をふくらませる言葉だ。後ろについてくるのが「かまわなかった」か「いやだとは言わないけれどよくもなかった」か「今さらいいも悪いもあったもんじゃない」か、女って考えちゃう生き物だ。伊藤くんならわかっていそうなのに、ああそれでか。脱いだわたしに、伊藤くんも「女ってめんどくせー」の本性をあらわにした。だけどわたしが言ったことは全部じゃない。適当に埋め合わせた部分もある。わたしですら怖いのだ大丈夫だの、どれが本当のところなのか知らないのに。

「桐島、さ」

伊藤くんに背を向けた。そういう瞬間に限って、声をかけられる。

「佐野のこと追っかけてるくせにとか、思ってるんだろ。おれ、佐野が好きってわけじゃないから」

「なにそれ」

やっぱり軽い冗談のつもりだったんだ。ちゃんと考えていた里奈を思うと、蹴り飛ばしたくなる。わたしとの議論に持ち上げるほど真剣に捉えていたってのに、ちょっとからかって遊んでやろうってだけだったんだ、伊藤くんは。

「興味あるんだよ。だから付き合って、どんなやつか知りたいなって思ったんだよ」

伊藤くんも、もっともっと深く掘り起こせないところに、本性を置いているのかもしれない。

「好きでもないのに、付き合えるものなの？」

そういうの、三ヶ月で亀裂が入るものじゃないの？ 好きだという大きくて強い気持ちがないのなら、なにが二人をつなぎ止めるの？ 聞きたいことはたくさんあるのに、全部さらっと返されそうで、わたしは一つしか口にできなかった。

「なんとかなるだろ。相手を知るために付き合うんだ。知ったらまたそこからもっと知りたくなることが生まれるだろうし、それが続いてったらさ、楽しそうじゃん」

あっそう。そうなの。

「早く服、着れば。変なのに触っちゃったらって思うと、なんかいや」

その変なの世話になったのだけれど、むき出しになった伊藤さんと接していたら、みじめになりそうな気がした。

「うっさいな、下着だけ一人前のくせに。ちゃんと手入れすること、しとけよ。処女丸出しじゃん。見られるってことを想定してなさすぎ」

なにか布が飛んできて、わたしの顔を隠すように落ちる。

「はみ出さないように整えとか、トイレットペーパーのかすがつかないようにとか、つーか自分の、見たことあるかよ。見ながら洗ってんのかよ」

手に取ってみれば、わたしの制服。おまえも着ろってか。早く隠せってか。

「.....そんなにひどいってわけじゃないけど。桐島だったら絶対いいやつに好かれるからさ、そんなときにもう初めてじゃなくなったし、でも、大丈夫だよ絶対」

うまく、息を、飲み込めない。今さらながら見られることに、見られたことに、見せていたことに、顔が熱くなる、胃の中身がぎゅるぎゅるねじれる。

わたしは大人を、取り繕っていただけ。見せかけだけ。目に映る範囲だけ、だから、月岡はわたしを大人の女だと思う要素を感じなかった。

「大丈夫だよ、おまえはいいやつだから。佐野があんなに、おまえと二人で、自然にしてたじゃん」

いつもより低いトーンで言われたら、里奈のことは本気だったのかと思ってしまう。よそ行きの気の抜けた顔でやるから、軽く感じていただけで。よっぽど大人だ。みんな大人だ。みんなみんな、本当はわたしより五年も六年も前に生まれた人なんだ。

月岡に抱いてほしいと思うのは、今になっては意地も混じっているんだと思う。

きんと澄んだ空気のせいか、空の紺が濃い。熱が消えても感触はまだ残っている。伊藤くんの指や手のひらや爪、唇が触れた軌道を、まだそのままになぞれそうなくらい。月岡ならどんな触り方をするか想像してみようとして、もう月岡以外の手垢がついた自分の体が恐ろしくなる。強く強烈に寒気が走って、くしゃみが出た。鳥肌がなかなか収まらない。

やっぱり、月岡じゃなきゃだめだったんだ。

月岡と付き合いたいと思わない。あんなのと恋人になったらいちいち神経を逆なでて、ほら野菜を食べる風呂に入れ服は毎日着替えて洗濯をしろと、常に怒鳴ってなきゃならない。のどの潰れが縁の切れ目になってしまう。蛙だって関心を持ってもらえないまま、潰れた。興味はあるのに。そうじゃなきゃ出会ったあの日、ついていかなかったはずだ。

興味は、ある。月岡の家族のことも、下の名前も血液型も生まれた場所も、きちんとした年齢も知らないまでも。興味はある。あった。ずっと、あった。

知らないでいることがわたしたちの関係のあり方だと思っていた。どんな人か知れたら。興味があるから、どんな人か知れたらいい。伊藤くんは言っていた。そうだ。わたしも、ちゃんと月岡の口から聞いて知りたい。

*

雪は一晩かけて、外を真っ白に埋めた。それでもわたしはローファーで通学した。レインブーツも履いてみたけれど、制服に合わない。足首から下が子供くさくなった。せっかく子供を捨てたからには、見合う格好をしなくては意味がない。取り繕うとするんじゃなくて、形から入ってみようと思う。

降ったり止んだり、溶けてもまた降り積もったり。身を縮めながら、一週間を歩いた。

小さいころに絵本で読んだ話だと、雪は音を吸い込んでしまうらしい。確かにそうだろう。わたしと伊藤くんが付き合っているといううわさは、きれいになくなっていった。というより、すり替わっていた。

「周子、伊藤くんと別れたことになってるよ」

眠たいのか目をこすりながら、それでも笑った顔で里奈が教えてくれた。別れたもなにも最初から付き合っただけですらいなかった。このごろ伊藤くんがわたしに付きまとわなくなり、わたしも伊藤くんの相手をする必要がなくなっただけだ。今日はこっちを見もしない。里奈を見守るのもやめたんだろうか。どうして？ この間の話だと、諦めた様子はなかった。

里奈は今日もメロンパンを持ってきている。わたしはふりかけのかかったご飯を箸で一口分持ち上げながら、いつまでたっても封を切られないメロンパンを気にしていた。

「里奈、食べないの？」

顔色も悪い。白いのは化粧のせいにしても、青白いから胸が落ち着かない。

「んー、なんかお腹空かないんだよね」

ついこの間まで三つも四つも一回に食べていた人が、なにを言っているんだか。原因はなんだろう。一番に思い当たるのは彼氏だけど、いつも里奈は自分からその話題に触れないでいるのに、わたしが踏み込めるはずもない。ゴムの話を思い出す。

午後の授業も、里奈はずっと寝て過ごしていた。自由なのはいつものことだけど、今日は本気でぐっすりだった。六限目に先生から教科書で頭をたたかれても、ぴくりとも動かなかった。夜に寝なかったのだろうか。どうして？ やっぱり彼氏かもしれない。

放課後になっても里奈は掃除当番を早々に切り上げて、一人さっさと教室を抜け出した。わたしはそれを、教室の窓から見ていた。里奈もたぶん、あれはローファーを履いているんだろう。ブーツ状のものを履いているようには見えない。大股で、不恰好なものかまわず膝を上げている。三階から校門を見下ろしての確認だから、想像に過ぎないけれど。

黒い車が校門に身を寄せて停まった。里奈を助手席に乗せて、発進した。その後ろを自転車一台、猛スピードで追いかけていく。やっぱり三階から見てのことだから、自転車じゃなくてバイクだったかもしれないし、追いかけたんじゃなくてたまたま行き先が一緒だった可能性もある。窓に押し付けた新聞紙を、左右に動かす。窓拭き掃除はこうやって、さりげなく手を抜けるか

ら好きだ。

雲行きが怪しい帰り道を、一人で歩く。今夜また降ると、天気予報が言っていた。かばんの中に折り畳み傘はひそめてある。相変わらずローファーで、凍った帰り道を歩く。里奈は、と心配しかけて、彼氏の車に乗っていったことを思い出す。大丈夫だろうか。

久しぶりに、月岡のところへ行こうと思った。行きたくなった。

わたしは子供を捨てた。学校にいても楽しみは窓拭き掃除くらいで、それさえ自ら進んでのことじゃないとなれば、空っぽが重苦しい。息が詰まる。足取りが重たいのはそのせいだ。……そのせいだ。

里奈のことは気にしたって仕方がない。わたしも打ち明けていないことがあるまま、ねえ話してみてもよと言えたものか。月岡のことに伊藤くんのことにも加わった。里奈に言う？ なにをどこから？ どうやって？ このままわたしが言えないからって、里奈にも言わせようとしなのは、卑怯だとわかってはいる。

月岡の部屋の前に立つ。心臓がうるさい。深呼吸をしても静かにならなくて、乱暴にインターホンを鳴らす。月岡は顔を出さない。

ここを最後に訪れたとき、わたしは逃げ帰った。受け入れてもらえなくなったかもしれない。わたしは月岡を拒絶した。受け入れなかった。そのくせまだ受け止めてもらおうと、自分のことにばかり捉われて。伊藤くんの部屋に捨ててきた子供が帰ってきたみたいでうんざりする。伊藤くんのベッドの下に放り投げてったつもりが、バウンドしてわたしの体に直撃、そのまますり込んで元通り、か。

こわごわとドアに手をかける。扉はゆっくり開く。鍵がかかっていない。どこか近くに出かけただけと思うことにして、足音をひそめて玄関をくぐる。

テーブルの上には、数本の鉛筆。ティッシュを広げた上に、削りくずと一緒に転がっている。カッターもとなりに寝ていた。本棚の隙間のあちこちに押し込められた鉛筆立てには、カッターもたくさん並んでいる。青いものも黒いものも、おしゃれにオレンジ色のものも。どれがあのとときわたしの手のひらを切ったものなのか、覚えていない。

月岡を誘惑した線は、とっくに消えている。血は出たものの傷は浅かった。どんなに心を決めて足を開いても、胸の横で腕をよせても、びくともしなかった月岡が、うろたえて欲情した。血に。反応を示した。もしかして、そっちにしか興奮できない、のか。

テーブルの上のカッターを手取る。先端に木くずが群がっている。左の指の腹で、ぬぐった。きれいになったカッターから、わずかに刃が覗いていた。とっさにカッターを投げ捨てる。木くずを取り払った指先に、一本の筋。こぼりと丸く、ふちに赤が湧いてくる。

「なにしてんだ」

突然の声に振り向くと、月岡がいた。とろけた目。だらしなくしわだらけのシャツに、色あせて裾もぼろぼろのジーンズ。わたしがよく知っている姿。

「どこ行ってたの、鍵開いてたよ」

「おとなりに皿返しに行ってたんだよ。おまえ、靴くらいそろえて脱げよ」

そこで初めて、月岡はわたしが靴を脱いでいるところを見たことがないんだったと思い当たる

。いつも玄関のドアを開けたらさっさとリビングに行くからだ。靴をそろえて脱いでいるのか、意識したことがなかった。今、言われてようやく、わたしもなかなかにだらしのないのだと知った。

血が噴き出す指を月岡に突きつける。

「なんだそれ」

「切った。カッターで」

血が空気に触れているからか皮膚に染みているからか、空気の動きがじくじくと痛みとして感じ取れる。月岡の目も、うろたえている。充血気味にうろおっている。

うれしくなって、ブレザーの袖をまくった。手首にカッターを添える。横向きにかまえた。やったことはない。漫画やテレビでそんな行為もあると知識をつけただけだ。死にたいけど死ねず、死にたいのに生きたい人が取る行動。わたしは死にたくない。生きていたいか考えてもいない。女として興味を持ってほしいだけ。子供を捨てたわたしを、さらに大人の女に仕立て上げてやるんだ。

それなのに。

ぴっと一本の線を引くだけの力が出ない。震える手を悟られないように、カッターを握っているだけで精一杯だった。

「魚をさばいたこと、あるか」

一つうなずくだけに、ずいぶんと時間をかけてしまった。中学校の調理実習で、一度だけ。言おうとしても、唇を噛み締めていないと、なにが口から出てくるのか想像できない。

「切るなら縦だ」

月岡はつぶやいた。眉根が寄り、きれいな顔が崩れる。生きた色の目は細められて、月岡も震えていて、手の中のカッターが急に重くなった。

「血管は縦に走っているだろ。切るなら縦だ。魚の腹をかっさばくみたいに、血管ごとやるんだよ。そう聞いたことがある」

のどが渴いた。ついにカッターを落としてしまう。頬が熱い。さらに熱いものが通ったと思ったら涙だった。出血のはじまりみたいに丸くふくらんであふれてくる。カッターを拾わなければ。月岡はわたしを求めてアドバイスをくれた、横じゃない縦だ、血管ごとやるんだそうしたらわたしは月岡の前で女になれるなるんだならなくちゃ。戻ってきた子供を血液ごと吹き飛ばせばいいんだよ。だから、早くカッターを、

「でも、だめだ」

拾ったのは月岡だった。静かに泣いている。声を出さずに涙だけをこぼしている。

そんな月岡と違って、わたしはついに、しゃくりあげてしまった。潰れた蛙みたいで気持ち悪い声だ。死にぞこないの蛙。死にたいのに死にきれない蛙。昔、月岡がよく目にしていた蛙と、どっちの死にぞこないがきれいだろう。潰れていなくても、汚れた蛙。

なにも握らなくてよくなった手を、月岡がそっと、包んでくれた。しゃっくりなのか叫び声なのか嗚咽なのかわからないものが、お腹の底から吐き出されていく。

「おれはきれいなものしか描きたくない。おまえを潰れた蛙にしたいくないんだ」

ついに締め出されたわたしは、ドアの隙間が完全になくなるまで、あからさまに顔をそむける月岡を見ていた。洗っても拭えそうにないにおいがするからって。わたしの手にうすい手帳かなにかを握らせて。ドアを、閉めてしまった。

手帳を開く。……ばかだ。中身を確認して突き返せばよかった。受け取ったら、なんにもならない。ずっとそう思っていたのが、最後に崩れる。預金通帳と、カードとメモ。メモを開く。鉛筆の芯の香りがした。湿った空気の中で、つんと鼻の奥をにじませる香り。もうなつかしい。

暗証番号 おれとおまえの誕生日を足し算した四桁

いつだよ、ばか。聞けずに終わった数字を押し付けないでよ。なんであんたはわたしの誕生日を知っているんだ。もしかしてわたしがお風呂で温まっている間に、生徒手帳かなにかを覗いた？ 女子高生の荷物を勝手に漁ったの？ なるほどたまーに鞆の中身がきれいに整っていることがあったわけだ。ついでの優しさに、鼻の奥がつうんとした。冬の日の、浴槽への第一歩を踏み出したときに似ている。

帰るべき、だ。ここに立っていてもどうしようもない。ドアを叩く気力もない。エレベーターの方向に鉛の足を向ける。

「あ？ 桐島？」

向けた足が跳ねる。本当にコンクリートから浮いた気がした。振り向いたすぐそこ、おとなりのドアの前。見知った顔が、二つ。白く息を切らして、こっちを見ている。

「は、え、なに、伊藤くん？ なんでここに」

「なんでってここ、こいつんち」

「いやいやいや、ていうか、あのさあ」

待て、月岡から聞くおとなりさんの名前は、えらく健康的な……、健康的、な。

「おいばか桐島、人を指差すなって教わらなかったのかよ」

「も、と、ひ、さ、口が悪いよ。えっと、その、桐島さんも、うちに上がりますか？」

健康的な名前。わたしが思わず指差して、伊藤くんがこいつとあごで示した先で、おどおどとお辞儀をする、右近麻香。手入れのされていないぼさぼさごん太昆布まゆ毛が、八の字に垂れている。右近麻香。ウコンにマカ。里奈がつけたあだ名。昆布ちゃん。月岡は、あだ名までは知らなかっただろうけど。ウコンでマカで、昆布。

口をぱくつかせることしかできないわたしを、釣り合わない二人が右近家へと吸い寄せていく。

右近家は月岡の部屋とシンメトリーな間取りだったから、ふらついたままでも居間に行き着くのは簡単だった。構造が左右対称なら、空気もまったく逆だ。うす緑のカーテンは開いていて、窓からきちんと光を入れている。醤油が香っている。晩ご飯はなんだろう。

取り込んだ洗濯物だろうか、ソファの上に散らばる衣服の山の中から、昆布ちゃんはなにかを

発掘した。片付けろだなんだ叱りつけている。かすれた声が気だるげに文句を返す。弟かとも見ていると、目が合う。変声期で反抗期の中学生だろうか。照れくさそうにお辞儀をされた。

「誰あれ。元久の彼女？」

「はあ？ ちっげーよ、クラスメイト。麻香の友達の友達」

「他人じゃん」

答えた伊藤くんは鼻で笑われた。他人。つい拳を握ってしまう。せつかく形だけは大人になっても、わたしは優しくできなさそうだ。引きつった笑顔で勘弁してやる。

「あ、姉ちゃん。さっき月岡さんが、皿返しにきたよ」

「本当？ りんご、食べてくれてそうだった？」

「田舎からのものをお裾分けされたって、お返しができないから困るってよ」

弟はそれだけ報告すると、リビングを去っていった。月岡の部屋でいう書斎のドアを開けて、引っ込む。昆布ちゃんも伊藤くんも、弟の去っていったドアからこっちに顔を向けて、わたしの言葉を待っている。りんごはわたしがむいておいたけど、その後どうなったのか知らないから、黙っていることにした。静かになると、月岡の部屋を思い出す。かと思ったけど、そんなことはなかった。ここは暖かくて、人間のにおいが強すぎる。

「なにから聞けばいい？」

はっきり言ってしまうえば陰キャラの昆布ちゃんと、みんなのアイドルかっこわらいな伊藤くん。そんな二人が下の名前呼び合って、よそ行き用の顔を取っ払って接している。おまけに当たり前のように家に上がって、伊藤くんは昆布ちゃんの弟にまで下の名前で気安く呼ばれ、伊藤くんも気安く返す。さらになんだって？ わたしが昆布ちゃんの友達の友達？ わたしたちの共通の友達って誰よ、伊藤くんじゃないでしょうね、友達になった覚えはないからね。とんでもないことしちゃっても、友達なんかじゃ、ない。

「簡単に言うから、座れよ」

右近家ででかい顔をする伊藤くんは、弟が掘り起こされた山に身を納める。昆布ちゃんはキッチンへと小走りで駆けていく。ソファの足元に詰まれた漫画雑誌やぼろぼろの教科書の隙間に、わたしはひっそり体を埋める。

「おれと麻香はいとこで」

「は？」

「麻香と佐野は幼なじみ」

「はあ？」

「麻香があんまり佐野の心配するから」

「ねえ、ちょっと待ってよ」

「どんなやつだろうって遠巻きに気にしてたら興味持ったってわけ」

説明してくれたらなんでもいいってわけでもないのに、一方的に押し付けられた。洗濯物の山に身を縮めながら、伊藤くんはときおり大きく伸びをする。湯気の立つカップを三つお盆に乗せて、昆布ちゃんが戻ってきた。

「元久、説明が雑すぎるよ。ていうか洗濯物、たたんでよ」

「しょうがないだろ、疲れてんだよ」

学校じゃ視線すら合わせないのに、小突いたりなだめたり、きょうだいみたいだ。あ、いとか。昆布ちゃんから受け取ったカップには、ホットミルク。一口飲んだら、わたしも肩の力が抜けた。伊藤くんはぶつくさ言いながらも、散らかってしわになっているタオルやら服やらを、のろのろとたたみ始めた。下着にまで抵抗なく、真顔のまま触る。

昆布ちゃんがわたしの様子をうかがいながら、となりに腰を下ろす。

「元久、あ、伊藤くんが言ったことなんだけど、佐野さんとわたしは小学校が途中まで一緒で」「普通にしゃべってよ、わたしにも」

あだ名は親しみをこめたからか이었다。わたしだけが外の人だ。ずっと里奈と一緒にいたのはわたしなのに、ミルクの湯気に胃がきしむ。他人。

昆布ちゃんの話をもとめると、つまりこうだ。里奈と昆布ちゃんは保育園から小学校の三年生までを一緒に過ごしていた。四年生になる年に、里奈の両親は思い切って念願の一戸建てを購入。引っ越しによって小学校生活の後半、中学校の三年間を、里奈は昆布ちゃんとは違う学区で学ぶことになる。最初の数か月は文通をしていた。けれど里奈も新しい環境に馴染むと、手紙の感覚は一か月、三か月、半年と空いていく。中学校に進学したころから、里奈の手紙の文字は丸みを帯びて、ラメ入り色ペンで書かれたハートや星や汗マークが眩しくなった。一方で昆布ちゃんは弟と一緒に触れるアニメや漫画やゲームの世界に興味を膨らませる。話題のすれ違い、というより成長の方向性の違いもあって、中学二年生の冬、ついには年賀状すら途絶えてしまった。

伊藤くんについても教えてくれた。伊藤元久は物心がついたころから人懐っこさがずば抜けていて、いくつになってもにこにこしていたら明るい一面がすっかり定着、きらきらしていなくちゃいけなくなった。本性はこんな調子で態度がでかく、口も素振りも乱暴で、昆布ちゃんは世話を焼かないと落ち着かないそうで、同じ高校を受験することとなる。もっとも、そこに里奈までそろったのは偶然らしい。

「だって元久、一人じゃなんにもまともにできないんだよ。女子のご機嫌を取るためだって、いつもお菓子ばかり持ち歩いて食べて、制服のシャツにも自分じゃアイロンかけられないし」

「おい、それ言うなって」

「人のご機嫌のために世話を焼こうとするならさ、まずは自分のことをしっかりしなよ」

伊藤くんの舌打ちが聞こえる。なるほど。それで伊藤くんは、いところに頭が上がらないわけだ。

昆布ちゃんが高校で再会した、かつての親友の様子がおかしい。女子であるはずの自分以上に女子と仲良くなるのがうまい、同い年のいところに相談した。髪や服装に命をかけることに興味がない自分より、そういった女子を自然と集める王子様のほうが、心情を理解できると思ったらしい。派手になったのは性別と年齢を考えればなんともないけれど、

「佐野さん、なんであんなにメロンパンばかり食べてるのかなって、気になったの」

「なんでって、好きだからでしょ」

「そうなの？ 佐野さん、昔はメロンパン嫌いだったんだよ」

わたしはカップに口をつけたまま、すすれない。昆布ちゃんは細かくまばたきを繰り返して、

息を吐くように続ける。

「わたし、メロンパンが好きでよく食べてたんだけど、佐野さんはすっごくいやがってた。口元がべたべたするでしょ、しかも一つが大きいから食べきれないし、ぼろぼろこぼれるし、いいところないじゃんって」

なんだそれ。そんなの聞いていない。ついでに彼氏まで引っかけちゃうほどメロンパンのために渡り歩いていたんだ、そのくらい里奈はメロンパンが好きなんだ、情熱を注ぐほど年季の入った「好き」なんだ。……もし昆布ちゃんの言うことが本当でも、小学生までのことじゃないか。味覚が変わって、好きな食べ物が増えた可能性だってある。

カップが熱い。漫画雑誌の山のでっぺんに置く。聞いていないのは、こっちが聞かなかったからだ、誰かが頭の中に吹き込む。首を横に振ると、少しだけ振り払えた気がした。

「おれたち、あいつの車を追ってたんだよ」

「車？」

「佐野が乗ってた車。どうせ彼氏だろ。麻香と二人乗りして、自転車で追っかけてった。やっぱり追いつけなかった」

わたしが教室から見ていたあれは、本当に自転車だったのか。追いつけなくて当然だ。

「なんでそんな無謀なことするの」

無謀だろうと、わたしはなにかしただろうか。踏み込んだだろうか。だって、触れ方がわからなかった。そっとさりげなく撫でる、強く肩をつかんで揺さぶる、腕を引いて歩く、どれが正解なのか考えもしなかった。言われぬから言わないでいた、聞かないでいた。

猛スピードで後ろを追いかけて、捕まえようとした昆布ちゃんは答える。

「嫌いだったものばかり食べてたから。でもわたしはそれを好きだったし、助けてっていうサインなのかもって、思ったんだよ」

*

里奈に初めて声をかけたときのことを思い出す。

高校の入学式、教科書販売の列。わたしの二つ前に、里奈は一人で並んでいた。わたしも一人だった。列の中にはさっそく友達を作っておしゃべりをしている子も多い。せまい廊下に黄色いおしゃべりがこだまする。

わたしは二つ前に並ぶ女の子の、鞆にぶら下がるキーホルダーを、にらむ。ヒョウ柄のハート。窓の外の桜より、強くわたしの目を引いた。同じものを家の鍵につけている。

「それ、雑誌のふろくだよね。あれ読んでるの？ わたしも好きなんだ」

かける言葉だけは用意できていた。

「あのモデル、超スタイルいいよね。わたしが好きなブランドの服とかよく着てるから、ほんと羨ましくなっちゃう」

口は閉じたまま。

「まあブランドものの服なんて着れないんだけどさ、どうせ。買ってもらえないし、お小遣い貯めたって店がないし。せっかく高校生になってもバイト禁止だしね」

間にもう一人はさんでいる、またいで声をかけるのはその子に失礼だ、言い訳を脳内で繰り返す。一歩進むたびに、黒い皮の鞆で、ヒョウ柄のハートが揺れる。

二つ前のその子は教科書を受け取ると、前の子に続いて歩かずに、ぽつんと立ち止まってしまった。わたしは心の中で、一つ前の子をせかす。早く終わらせろよ、お金の入った封筒くらい列に並んでいるうちに出しとけよ。祈りは通じた。わたしが教科書の入った紙袋を受け取っても、二つ前の子は呆然と立ち尽くしたままだ。わたしはやっと、用意していた言葉を取り出せた。口にするだけで必死だった。たぶん変な顔になっていたと思う。里奈も変な顔をしていた。

「ねえ、わたしさっき、おつりをちゃんと受け取ったっけ」

おろしたての制服が、わたしたちの表情も頭も固くしたのだ。

教科書重たいね、教室はどっちだったっけ、どこに戻ればいいんだろうもう帰ってもいいのかな。ぎこちなくも、わたしの口元はつり上がっている。名前を教え合った。ちょうど紙袋を持ち直したから、相手の子の名前を聞き取れなかった。聞き返すのは失礼だと思った。初対面なのに聞いていなかったと思われたくはない。

会話の中で、わたしたちは同じクラスだとわかった。出席番号を聞き出して、家に帰ったらもらったクラス名簿で確かめようと、高校での最初の宿題を背負った。

会話が途切れ途切れだったのはその日だけ。あとは……興奮気味にメロンパンを語る里奈。どれだけまくし立てても、最後の語尾は柔らかかった。どこのコンビニのがおいしい、あそこのスーパーのは安くて大きいけどぱさついている。あのころはわたしもまだ、化粧をしていた。

毎日撮りに行ったプリクラ。ゲームセンターのお兄さんに顔を覚えられてしまったことを、二

人して笑った。赤点の追試で手を組んで、カンニングをした。となりで見っていた男子にも、こっそり答えを教えてあげた。暇人に告白されたときも、いいじゃん付き合ってみなよと喜んでくれた。結局は暇人そっちのけで、里奈とのファミレス談義に燃えた。

「周子、いいの？ 彼氏」

「いいよ全然」

里奈といるほうが楽しい。そう言えばふにやりと笑いながら、テーブルの下で足を蹴ってきた。自分に酔ってしまった暇人から、友達とおれとどっちが大切かと詰め寄られても、わたしたちは議論のいい種を見つけたと、早歩きでファミレスに向かった。

それなのに、わたしは化粧をやめた。理由を話さずに。里奈はなにも言わなかった。

*

右近家からの帰り道、里奈との思い出に気を取られて、何度も氷に足を滑らせた。ブレザーのポケットに両手を突っ込んで歩いていたら、うまく受身が取れない。ポケットに手を入れて歩くなという幼稚園での教えを、今さら飲み込んだ。

積もった雪は道路の両脇に追いやられて、こんもりそびえ立っている。黒く汚れたり茶色くにごって水になったりしながらも、まだ白い部分が目立つ。

里奈は今、彼氏に会っている。知っている。車に乗って行くのを見ていた。追いかけていった伊藤くんや昆布ちゃんからも、話は聞いている。

ポケットの中の右手で携帯電話を捕まえる。手のひらの熱でべとついてた。取り出して、通話履歴を開く。一番上の名前は確認しなくても、そのまま通話ボタンを押せばいい。

伊藤くんは昆布ちゃんの家で晩ご飯を食べていく気満々だ。今夜は鍋にするらしい。準備が整わないうちから、テーブルに鍋敷きを置いて鼻歌を歌っていた。それでもわたしが帰るとつぶやくと、昆布ちゃんと一緒に玄関まで見送ってくれた。二人して「頼むよ」なんて深刻に言う。

「頼むって、なにをさ」

「佐野のことに決まってるだろ。おれたちじゃ追いつけないんだよ、桐島が捕まえるしかない」

男の子の脚力での自転車全力疾走より、スピードを出せてか。

「桐島はさ、男も知らないで怖がりなくせに突っ張ってて、そのくせ必要以上に押してこないから、佐野も居心地いいんだと思う」

今日初めて会話をした昆布ちゃんすら、わたしのことをわかったようにうなずいている。

「よく知らないけど、たぶん月岡さんもそうだったんだよ。わたしがお裾分けや回覧板を持っていっても、絶対に家の中を見せようとはしなかったんだよ。ドアも顔が覗けるくらいしか開けてくれなくて」

招き入れた桐島さんとの時間は落ち着けるものだったんだよ。そう、口にしながら。

「前は大学に行ってたみたいだけど、今は行ってないよね。卒業したにしても、失礼だけど働いて、る？ 家賃のことでもめてる様子はないから、仕送りとかもらってるのかな。変わった人だけど、前ほどとがってないように思う。桐島さんの影響だよ、きっと」

わたしのことを知らなくても、わたしが知らない里奈を知っている人。里奈の根っこができるのを見ていた人。その人がうなずくのなら、わたしは根っこに吸い付けるはずだ。里奈はもちろん、月岡も。

「麻香」

ドアノブに手をかけて、親しみを込めつつも、背を向けたまま呼んだ。

「今度その眉毛、整えたげる」

麻香の苦笑が聞こえた。いきなり眉毛はハードルが高かっただろうか。

「桐島さんもよかったら、今度ご飯を食べにきてね」

わたしはしっかり、うなずいた。

鳴り止まない呼び出し音がぶつりと切れる。二秒くらいの無音は、留守電サービス接続の合図だ。里奈ならすぐに「もしもし周子？」と弾んだ声を聞かせてくれるはずだから。わたしは指示に従って、ピーっという音に続けて、用件を吹き込んだ。

もしもし、里奈？ 突然ごめんね。突然ってというか、ずっとごめん。なにがごめんって、もしわからなかったら今度ちゃんと説明する。だから……話したいんだ。わかったよ。わたし、同年代のいいところ、見つけたから。話そう。

——メッセージを一件、お預かりいたしました。

機械質なお姉さんが、言った。

明日からお弁当を持っていくのをやめよう。里奈と一緒にメロンパンを買うんだ。

わたしは大人になれそうにない。さりげない優しさを持つ自分は、想像できないままだ。里奈も同じなのかもしれない。大人びた彼氏といるのは心地いいだろう。けれど神様みたいに思ってしまうから、背伸びしなくちゃ届かない。

わたしは背伸びしなくても届くところにいる。浮いたかかとを地面につけようと、追いかけた人もいた。だから、話そう、里奈。言いたいことは、たくさん積み重なっている。

月岡も。会話をしよう。

そうだ、まずは明日、いつもより早く家を出よう。カイロを買い込んで、月岡の部屋のドアノブに、袋ごとぶら下げてやろう。わたしの部屋を引っかき回せば、前まで使っていた膝かけが出てくるはずだ。それも押し付けてやる。

潰れた蛙を描いていたなら、月岡はそれをきれいだと思っていたんだろう。それならわたしも、きれいであると思いたい。「きれい」と「汚い」の区別がつけられるなら、月岡だって、きれいな心を持ち合わせているってことになる。

手をつないで、話そうよ。

雪が降れば白く染まるみたいに、わたしたちも一緒くたになれるから。

雪降れば白く

<http://p.booklog.jp/book/98610>

著者：うーさー

<http://p.booklog.jp/users/gohantaberu13/profile>

感想はこちら

<http://p.booklog.jp/book/98610>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/98610>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ